

## *Heart of Darkness*における思想と行動の乖離\*

杉浦 廣治

ジョーゼフ・コンラッド (Joseph Conrad) の『闇の奥』 (*Heart of Darkness*) における語り手マーロウ (Marlow) は、アフリカへ出発する前に、アフリカを流れる大河を運航する汽船の船長職について自嘲気味に次のように語る。

It appeared . . . I was also one of the Workers, with a capital . . . . Something like an emissary of light, something like a lower sort of apostle. There had been a lot of such rot let loose in print and talk just about that time.<sup>1</sup>

この作品が扱う時代である19世紀末のヨーロッパで、帝国主義イデオロギーを隠蔽する植民地向けのスローガンとして、「未開地への光の使者となれ」といった類いのものがあつたことは容易に想像できるが、上記の引用からわかることは、マーロウはそうしたスローガンが偽善的で、美名のもとに、未開地に対して帝国主義的施策による暴力が振るわれ、搾取と支配が行われる実態を見透かしていることである。

マーロウはアフリカへ出掛ける前に会社の事務所のある「都会」を訪れたときから、すでにそこを“a city that always makes me think of a whited sepulchre” (55) と呼ぶのもそうした理由による。「白く塗られた墓」は、マタイ伝中でパリサイ人の偽善を、外側は白く塗られて美しいが、中は不浄なものが詰まっている墓にたとえたことに由来し、うわべだけを飾る意味に用いられている。マーロウは“The conquest of the earth, which mostly means the taking it away from those who have a different complexion or slightly flatter noses than ourselves . . . .” (50) と喝破し、ヨーロッパ人が光の使者や使徒まがいの聖者気取りをしようとも、彼等の行為は、未開人から一方的に富を奪うことであることを見抜いて

いる。

マーロウは、原住民が奴隷状態で強制労働を強いられる“the gloomy circle of some Inferno”(66)をまのあたりにし、ここまでの時点では、「都会」を白く塗られた墓と形容し、ヨーロッパ人が未開人に対して「光の使者」気取りをするさまを、前記引用で見たように、“a lot of such rot”と見なすマーロウの判断通りの状況が展開されていることになる。

中央支所でマーロウは一等代理人から、クルツ（Kurtz）が他の代理人とは違って、象牙狩りでは抜群の成績を挙げると同時に、“an emissary of pity, and science, and progress”(79)であると聞く。これはマーロウが中央支所および下流の支所で見えてきた白人達の軽蔑すべき行状からは想像できないことである。マーロウはクルツの描いた1枚の絵を見るが、それは“a woman, draped and blindfolded, carrying a lighted torch”(79)であり、これはヨーロッパ人のスローガンを絵画化したようでもあり、容易には理解し難いものであるが、マーロウがこの絵に引きつけられたことも一つの契機になり、確かに彼はこの時点でクルツに関心を抱くと考えてよいであろう。

その後のマーロウの心境を追うと、彼の語りは時間の順序を追わずに、ところどころにマーロウが後になって知ったことや感じたことを適宜まじえて話し、その中にはクルツの婚約者のことや、荒野そのものがクルツを魅了し、原始の闇が文明人に訴える力を持つことや、クルツがヨーロッパにあって、蛮習防止協会の依頼で書いた、人類愛に燃えた格調の高い報告書の末尾に、後になってから“Exterminate all the brutes.”(118)と書き込みをしていたことなどが語られる。これらの話の中には、高尚な志を抱いていたクルツが原始の闇の作用を受けて、原住民を皆殺しにしかねない凶暴な人間に変わったことなどが語られ、全体的にはクルツを犠牲者として見るマーロウの心境が語られる。

しかしこのマーロウの共鳴感を除いて、マーロウの話の中からクルツが行なったことを客観的に指摘するとなると、彼と他の所員たちとの決定的違いは見えてこない。クルツ以外の所員が、出世のために仲間同志で足の引っ張り合いをすることが、嫌悪感をもって語られてはいるが、アフリカ原住民の搾取と富の略奪をクルツが阻止した形跡は全く認められない。それどころか、他の代理

人では到底及ばないほどの象牙を武力を使って強奪する点では、クルツはヨーロッパ人によるアフリカ搾取の最右翼に位置するものであると言ってもよいであろう。

この意味では、ジョーゼフ・ビーチ (Joseph W. Beach) が、クルツをアフリカ搾取の “a personal embodiment” であると断じる次の指摘を否定できないであろう。

Kurtz is a personal embodiment, a dramatization, of all that Conrad felt of futility, degradation, and horror in what the Europeans in the Congo called “progress,” which meant the exploitation of the natives by every variety of cruelty and treachery known to greedy man. Kurtz was to Marlow, penetrating this country, a name, constantly recurring in people’s talk, for cleverness and enterprise. But there were slight intimations, growing stronger as Marlow drew near to the heart of darkness, of traits and practices so abhorrent to all our notions of decency, honor, and humanity, that the enterprising trader gradually takes on the proportions of a ghastly and almost supernatural monster, symbol for Marlow of the general spirit of this European undertaking. The blackness and mystery of his character tone in with the savage mystery of the Congo, and they develop *pari passu* with the atmosphere of shadowy horror.<sup>2</sup>

このビーチの見解に対してロバート・ホー (Robert F. Haugh) は1957年出版の著書で次のように言う。

We can agree Mr. Beach if we concede that the Conrad who wrote “Heart of Darkness” is different, not only in conceptual interests, but in technical methods, from the Conrad who wrote *Lord Jim* and *The Nigger of the ‘Narcissus’*. But the assumption of centrality in the story of social and economic commentary, and the assumption of a straightforward narrative pattern, are inadequate to extract the meaning from Conrad anywhere, and

especially from “Heart of Darkness.”<sup>3</sup>

ビーチはクルツを未開発国から武力で略奪する植民地拡大主義の象徴と見るのに対して、ホーはクルツをそのような象徴には見ていないことがわかる。ホーは次のようにも言う。

To Marlow he was a hero who had shown him the limits of the mortal spirit; and the situations penetrating into the human condition became more illuminating the closer we came to Kurtz’s darkness. His remarkable energies, his stature, his amazing appeal to fellow humans in his moments of darkest savagery, the very magnificence of his plunge into the pit of the universe, all these showed Marlow a moral universe, dark though it was.<sup>4</sup>

つまりホーは、クルツが自己の心の暗闇を人間一般の属性としてマーロウに啓示し、マーロウの共感を得たと解している。このような見方は以後現在に至るまで諸家の間には変わらずにある。

ノースロップ・フライ（Northrop Frye）はepiphanyの一つの意味として、“any moment of profound or spiritual revelation, as James Joyce adapted the term in Stephen Hero, when even the stroke of a clock or a noise in the street brings sudden illumination, and its soul, its whatness leaps to us from the vestment of its appearance.”<sup>5</sup>を挙げているが、クルツの今際の“The horror! The horror!”という絶叫がマーロウに与えた作用は、このフライの定義するエピファニーに類する一大啓示となっていると言えよう。

マーロウは、クルツの今際の叫びの中にクルツの自省の念を読み取る。多くの研究者もこのクルツの絶叫を高く評価し、クルツを“the remarkable man who had pronounced a judgement upon the adventures of his soul on this earth”（150）と呼ぶマーロウの姿勢に注目する。これは多分に倫理的判断に傾いた批評姿勢である。前掲のビーチは、マーロウがクルツに共鳴した部分については触れていないが、クルツが“The horror! The horror!”を発する瞬間をマーロウは、クルツ

にとっての“supreme moment of complete knowledge”(149)と明言しているのであり、マーロウの話が搾取の話のみならず、人間の魂の探求の物語になっていることは明らかであり、これをビーチも否定するはずもないであろう。つまりクルツは、性格の上で二つの面を持つことになる。一つは“The horror! The horror!”に凝縮された人間についての完全知を体現したクルツ像であり、今一つは、報告書の末尾に書かれた“Exterminate all the brutes.”に凝縮されたクルツ像である。

これについて今少し触れるならば、ロシア人青年の話から、クルツが部隊を編成して部落を襲って、他の全支所で集める象牙にも勝るほどのおびただしい量の象牙を獲得したり、杭の上に「反逆者」の首を並べたり、またロシア人青年の持つわずかな量の象牙に対しても、現地人に対するのと同様の貪欲な態度を取るなど、クルツの行動は、マーロウが下流で見てきた、原住民を死ぬまで酷使することと変るところがない。クルツが、“I had immense plans.”(143)と言うその計画には、クルツの言う“Exterminate all the brutes.”という言葉とも考え合わせれば、アフリカ奥地をすべてわがものとして征服しようとする壮大な帝国主義的な夢があると考えられる。したがって、感傷的にクルツに共鳴すれば、クルツは人間の「完全知」の象徴的存在となり、また客観的に彼の行為を見れば、ヨーロッパのある企業の施策に則り、帝国主義的行為を押し進める体制の象徴的存在となり、前述のビーチの論理を弁護することになる。

土民を鎖でつないで死ぬまで働かせるのも、土民を操って象牙狩りをするのも、また、所員たちがよいポストにつくために、はかりごとをして同僚を欺くのも、すべてアフリカの搾取という共通項のもとにある。客観的に見れば、マーロウの言葉のはしばしにうかがわれる、クルツがよくて「巡礼」が悪いといった善悪が対比されるような差はないと言うべきである。このような崩壊をきたすクルツにとっての鍵となる言葉は、“Exterminate all the brutes.”と“The horror! The horror!”であるが、この二つの言葉の背後にあるものは、クルツの未開人に対するたてまえとしての思想と、現実の行動との乖離とそれについての目覚めにある。

大塚久雄氏が、「思考と行動の目的合理性とは、目的と手段の関係をささえ、

したがって手段の選択にあたって的確な拠り所となるような因果関連が正確にかつ明晰にとらえられていること」<sup>6</sup>が必要と言うように、思考や思想と行動が調和していれば、自家撞着は生じないが、『闇の奥』の数年後に書かれた『ノストローモ』においても、この思考や思想と行動の乖離のテーマが明確に見えることを指摘しておきたい。『ノストローモ』ではチャールズ・グールド（Charles Gould）が、銀山の経営によって自国に秩序と安定をもたらそうと考え、狂奔するが、必ずしも良い結果を得ていないことに関して、語り手は次のように思考と行動の関係について述べる。

Action is consolatory. It is the enemy of thought and the friend of flattering illusions. Only in the conduct of our action can we find the sense of mastery over the Fates.<sup>7</sup>

グールドは理想を掲げて、その実現のために献身的努力をする。銀山の経営が国に秩序と安定をもたらすという命題そのものが誤っているために、彼の行動は目的を達成しえないということも考えられるが、ここで語り手の言っていることは、ただグールドにのみ当てはめて考えるのではなく、語り手が一般的な事柄としてとらえていると受け取るべきであろう。つまり思考によって策定した行動の計画は、それが実行に移されると当初の計画からそれてしまい、思考と行動とが矛盾をきたすことがあり得るということになる。この思考と行動の乖離現象について、ニーチェは次のように言う。

行動する者はつねに没良心 *gewissenlos* であるとは、ゲーテの言葉であるが、行動者はまたつねに没知識 *wissenlos* でもあるのである。彼は一事を為さんがために、大概のことは忘れてしまう。彼は自己の背後にあるものに対しては不公正であって、彼の知る正義といえはただ一つ、今生まれ出づべきものの意義だけである。かくてすべての行動者はその行動が実際に愛されるに値する以上に、無限にはるかに彼の行動を愛する。<sup>8</sup>

ここでニーチェが言わんとする趣旨は、『ノストローモ』の語り手が述べるものと類似する。行動の原理は必ずしも思考の原理とは一致せず、行動が意思に反する結果となることを言っている。

クルツにおける思考は、ヨーロッパにあって彼が書いたパンフレットに表明されている。それは未開人に対して博愛の精神で臨むというものである。だがアフリカ奥地での彼の実際の行動原理は、所有欲によって支配されるものとなり、その結果は「彼ら野獣を皆殺しにせよ」という一文に凝縮されるように、彼の行動は当初の思考とは正反対のものとなった。クルツの婚約者の理解する博愛の思想から出発したクルツも、そこから大きく逸脱することになる。ここに見られる思想と行動の乖離は、人間の現実の行動を操る内的原理の計り難さをえぐり出しており、この点において『ノストローモ』と『闇の奥』は共通する。この観点からクルツという名前と彼の体躯に関する次の記述を見れば、どのようなことが明らかとなるであろうか。マーロウはクルツをはじめて見たとき、次のように矛盾語法的に言う。

Kurtz—Kurtz—that means short in German—don't it? Well, the name was as true as everything else in his life—and death. He looked at least seven feet long. (134)

7フィートの身長といえ、2メートル余の希有の大男である。この大男があらゆる点で「短い」と形容するにふさわしいという、矛盾語法的なマーロウの判断から一体何を読み取ることができるであろうか。「短い」という表現には、クルツが短命に終わったということ以上の意味があると考えられる。この身体的特徴に関する描写の意味するものを考えるには、『闇の奥』に続いて書かれた『ロード・ジム』(Lord Jim)のジムについての描写を見る必要がある。『ロード・ジム』の冒頭は次のようなジムの描写から始まる。

He was an inch, perhaps two, under six feet, powerfully built, and he advanced straight at you with a slight stoop of the shoulders, head forward, and

a fixed from-under stare which made you think of a charging bull.<sup>9</sup>

この冒頭のジムの身体について形成されるイメージは、単なる身体的特徴を無作為に述べたのではなく、この作品全体におけるジム像を実に巧みに、形象的に描き切っていると言うべきであろう。客観的に見れば、ジムは、第4章までは作者に近いと考えられる語り手に語られるところでは、難破して海に投げ出された人々を勇敢に救い上げたり、嵐をものともせず、勇気のあるところを見せるような英雄的行為を常に願う青年である。だが、いざ現実にもそのような場面に遭遇すると、日頃の願望とは裏腹に、彼は臆病な行為しかできない。

800人の乗客を乗せた船が夜間に漂流物に衝突し、船が沈没するかもしれないという恐怖に襲われたとき、ジムは航海士として果たすべき船と乗客の安全に対する責務を忘れて、救命ボートへと飛び降りて逃げる。このことが世間の明るみに出たとき、本来ならば自責の念に攻められ、苦しむところであるが、ジムはそういう方向には向かわずに、勇敢な行動を取り得る次の機会を求め続ける。このジムについて語るマーロウは、ジムの弱点を認めつつも、ジムがことさら弱い人間ではなく、“one of us”<sup>10</sup>であると言う。ここには、ジムは弱さを持った人間ではあるが、それかといって例外的な人間ではないという、ジムへの共感がある。

マーロウは、ジムが常に実行不可能な“romantic achievements”<sup>11</sup>にあこがれる“imaginative beggar”<sup>12</sup>であるとは言いつつも、ジムが“a shadowy ideal of conduct”<sup>13</sup>を求める求道者的な意図を持つと解し、それを高く評価している。つまり、ジムが直接求めるものは、名誉ある行為であっても、それは単に名誉のための名誉というよりは、名誉ある行為に含まれる倫理的価値をマーロウは高く評価していると言えるであろう。ジムの眺めてマーロウは次のように言う。

... he was one of us . . . . the mystery of his attitude got hold of me as though he had been an individual in the forefront of his kind, as if the obscure truth involved were momentous enough to affect mankind's conception of itself . . . .<sup>14</sup>



マーロウは普遍的な人間としての側面をジムが持つと考えている。したがって、彼はジムの行動をただ単に彼個人の独自の行動ではなく、人間共通の行動としてとらえている。ここに人間の行動のあるべき姿を追う倫理的姿勢がマーロウに見られるのである。マーロウがジムをしきりに「われわれの仲間」であって、ジムの乗り組んだ船の船長とその部下のように、軽蔑感を持って語られる「彼ら」の仲間ではないと言う。<sup>15</sup> マーロウはジムの欠陥が、ただ彼個人のものでなく、人類普遍のものであると考えており、ジムの行動、とりわけ、とかく冒険活劇的な話として受け取られる、作品後半部におけるジムの行動をある程度の倫理感をもって眺めている。

このように、倫理的意識を持ってジムを眺めるとき、常にどこかの時点で挫折し、理想通りにことが運ばないジムには、意気込みに反して、何か少し欠けたものをマーロウは感じる。突進する雄牛のように、目を据えて行動に邁進するジムの身長が“an inch, perhaps two, under six feet”というように、“under”というマイナス志向の言葉で表現されるのは、理想の実現に少し欠けるという意味を表わすのにふさわしい表現である。ジムの身長の描写は、まさに彼の生きざまを形象化したものであろう。

これに対して、『闇の奥』では、クルツの7フィート余の身長描写はどのような意味を持つであろうか。国際蛮習防止協会のために書いたレポートは、博愛の精神に満ち、未開人の啓蒙を文明人の崇高な使命とする格調の高い論文である。ジムが高い理想を持ちながら、現実では挫折するように、クルツも高い理想を持ちながらも挫折する点では、ジムに類似するが、身長描写では、『ロード・ジム』と同一ではない。クルツの異常なほどの身長の高さは、たてまえとしての思想が崇高なことを意味し、クルツという名前は、実際の行動が卑小であることを意味するという、ひねりを利かしたコンラッドの意図を読み取ることができる。

作品の結末でクルツの婚約者は、クルツの最期の言葉が自分の名前であったことを知って、彼がヨーロッパにいたときと変わらない人間であることを確信するが、そのような虚言を、マーロウが軽蔑を込めた苦々しい思いで言うところには、依然としてクルツの最期の言葉が彼の意識から離れず、クルツから受

けた感銘を忘れられないマーロウが見られる。結局、第1部では、主にヨーロッパの植民地支配の実態を暴いているが、第2部と第3部では、クルツの崩壊とそれに寄せるマーロウの同情と共鳴が作品を支配しており、マーロウがクルツの婚約者と会う場面がとりたてて新たな意味を持つことはなく、婚約者との会見はあくまでもクルツへの共鳴の延長線上に位置するものである。しかしコンラッドは、『闇の奥』を掲載した雑誌の編集者であるウィリアム・ブラックウッド（William Blackwood）に宛てた手紙で、自分の書いた作品に触れて次のように言っている。

Mr George Blackwood's incidental remark in his last letter that the story is not fairly begun yet is in a measure correct but, on a large view, beside the point. For, the writing is as good as I can make it (first duty), and in the light of the final incident, the whole story in all its descriptive detail shall fall into its place—acquire its value and its significance. This is my method based on deliberate conviction. I've never departed from it. I call your own kind self to witness and I beg to instance *Karain—Lord Jim* (where the method is fully developed) —the last pages of *Heart of Darkness* where the interview of the man and the girl locks in—as it were—the whole 30000 words of narrative description into one suggestive view of a whole phase of life, and makes of that story something quite on another plane than an anecdote of a man who went mad in the centre of Africa.<sup>16</sup>

クルツのエピソードとは違った次元の物語を目指していると言うコンラッドが、ここで述べている意図に即して考えるならば、まず、マーロウが都会に戻って、文明人に対して抱いた感想に言及する必要があるであろう。マーロウはヨーロッパに戻り、都会で暮らす人々に対して嫌悪感と軽蔑感を持つ。彼は都会人に対して次のような感慨を述べる。

They were intruders whose knowledge of life was to me an irritating

pretence, because I felt so sure they could not possibly know the things I knew. Their bearing, which was simply the bearing of commonplace individuals going about their business in the assurance of perfect safety, was offensive to me like the outrageous flauntings of folly in the face of a danger it is unable to comprehend. I had no particular desire to enlighten them, but I had some difficulty in restraining myself from laughing in their faces, so full of stupid importance. (152)

このマーロウの心境は、クルツの婚約者に会うときと同一である。クルツがヨーロッパ出発前に彼女に言った言葉を信じる彼女を、マーロウは人間の内に秘めた脆さを知らない無知な人間と見なして軽蔑心と哀れみを抱く。つまり、クルツの婚約者とマーロウとの会見は、マーロウが総論的に都会人に抱く嫌悪感と軽蔑感を、クルツの婚約者という一個人に当てはめて具体化したものである。

クルツの婚約者との出会いの場面でも、マーロウは心理的にクルツに支配されている。マーロウはクルツに見られる脆さを人間の本質と見なし、それに気づいたことを大発見のように思い、それに気づかない一般人を軽蔑する姿勢は、冷笑的で、ペシミズムに傾斜することはあっても、弱い人間を強く生きさせるプラス志向の発想とは見なされない。もしその場面に、前掲のコンラッドの手紙にあるように、マーロウの心を占めるクルツの余韻とは別の、作品全体を貫くテーマを考えると、一つの可能性として、次のように考えてはどうか。つまり、マーロウを読者の意識の案内役としての役目はずし、いわば、ウェイン・ブース (Wayne C. Booth) の言う「内在する作者の規範」<sup>17</sup>を代弁しない「信頼できない語り手」<sup>18</sup>的性格の人物と見なすとき、次のような考え方が可能となる。

つまりマーロウのように「肉屋」や「警官」に囲まれた一般人の生活を軽蔑するのでなく、彼等に囲まれて、人々がクルツのように、墮落し、崩壊することなく、進歩した文明が、内に弱さを秘めた人々を崇高な存在とし、クルツが熱弁を振った博愛や人道主義の精神が、実践可能な観念として人々や婚約者の心に存在することを可能とする装置としての社会、いわば破壊的要素を内に

持つ、弱い人間を思想と行動の乖離の悲劇から守り、崇高な幻想を抱かせ、安心して生きてゆくための装置として機能する社会を作り出した人間の英知を積極的に評価する視点が考えられる。

人間の宿命を嘆くのみをのマーロウを、『ノストローモ』のキャプテン・ミッチェル（Captain Mitchell）やデクー（Decoud）に見られるように、「信頼できない語り手」と見なし、彼とは価値観を異にして、違った視点から眺める作者コンラッドの存在をこの手紙の中に読み込むことを本作品解釈の可能性の一つとして認めることができるであろう。

### 注

\* 本稿は日本英文学会第71回大会（1999年5月30日、於、松山大学）において口頭発表したものに加筆したものである。

1. Joseph Conrad, *Youth, Heart of Darkness, The End of the Tether* (London: Dent, 1961), p. 59. 以下同書からの引用はその頁数を引用末尾に記す。
2. J. W. Beach, *The Twentieth Century Novel: Studies in Technique* (New York: Appleton-Century-Crofts, 1932), p. 343.
3. Robert F. Haugh, *Joseph Conrad: Discovery in Design* (U of Oklahoma P, 1957), P. 39.
4. Ibid, p. 54.
5. Northrop Frye, Sheridan Baker, George Perkins, *The Harper Handbook to Literature* (New York: Harper & Row, 1985), p. 174.
6. 大塚久雄 『社会科学における人間』 岩波書店、1994, p. 46.
7. Joseph Conrad, *Nostromo: A Tale of the Seaboard* (London: J. M. Dent & Sons, 1958), p. 66.
8. ニーチェ 『反時代的考察』 秋山英夫訳、上、角川書店、1997, p. 132. 表記は現代表記に改めた。
9. Joseph Conrad, *Lord Jim* (London: J. M. Dent & Sons, 1948), p. 3.
10. Ibid., p. 43.
11. Ibid., p. 83.
12. Ibid., p. 89.
13. Ibid., p. 416.
14. Ibid., p. 93.
15. Ibid., p. 80.

16. Letter to William Blackwood, 31 May 1902.

Frederick R. Karl & Laurence Davies, eds, *The Collected Letters of Joseph Conrad, volume 2 1898-1902* (Cambridge UP, 1986), pp. 416-7.

17. Wayne C. Booth, *The Rhetoric of Fiction* (U of Chicago P, 1961), p. 158.

18. *Ibid.*, p. 159.